

「馬場小室山遺跡フォーラム」第86回ワークショップ

【復興の原動力！パブリック・アーケオロジー2018】

馬場小室山遺跡とまちづくり環境の「かわり」から、「山田湾文化」の復興パブリック・アーケオロジーへ

＜馬場小室山遺跡研究の新展開—縄文塚(「環提土塚」集落)の終焉と地域文化の解体にみる広域連動の解明—＞

知識・経験・思考・領域等にみられる現代的限界(建て前の×や+)からの知的解放(本音の÷や-)を目指して活動します！

新展開1	「ムロさま」の 「限界領域」打破 (墓場の公共性にみ る墓式と葬式、及び 「人骨集積」の真相)	馬場小室山遺跡「第51号土壇」から展望する縄文時代の葬式と「土器社会論」—「ムロさま」の 「累積型改新土坑墓」と「積葬墓」から探る「追埋設型土器棺集積墓」への途— (ムロ1)寺野東遺跡の「積葬墓」(「SX036埋設土器遺構」)に注目 (ムロ2)青森県の後期前葉「再葬壺棺墓」／列島晩期の再葬動向／「金田一型土器棺墓」／ 土井ヶ浜遺跡の「弥生再葬墓」 (ムロ3)福島県鳥内遺跡の晩期終末の「追埋設型土器棺集積墓」と弥生時代前期の合口土器 棺による「積葬墓」の土器社会論 (ムロ4)鳥内遺跡の弥生時代前期から中期初頭の「追埋設型土器棺集積墓」に観る北方砂沢式系文化 から「御代田式」へ、そして中部条痕文系土器による交替劇の様相 (ムロ5)中部から北関東西部における前期の「再葬壺棺墓」から中期初頭の本棺墓への移行 を「阿武隈文化」と比較し、東関東や南奥と関係の深い前期の「再葬壺棺墓」として 田川流域の栃木県芝工業団地内遺跡の様相を把握する。 (ムロ6)「焼葬」(秋田県藤枝遺跡の頭蓋骨無し)、「焼人骨集積」(岩手県蔭内遺跡)、「人骨集積」 (愛知県保美貝塚)と抜歯、そして「髑髏信仰」(長野県宮遺跡の「積葬墓」) (ムロ7)「人骨集積」と抜歯は＜犬歯＞VS＜犬歯+第1小臼歯＞の2系列が顕在化 (ムロ8予告)「人骨集積」から「土器集積」(祭式と葬式の統合)、そして「土器棺集積」へ
新展開2	「オムちゃん」と 「ムロさま」との 「限界知識」打破	土偶と土面／顔面付土版／人面文土器等の関係、そして容器形土偶／顔壺へ (オム1)泉坂下人面イデオロギーの拡散ネットワーク (オム2)「人面文インダストリ論」による「亀ヶ岡型変相イデオロギー」の出現 (オム3)「仮面土偶」の発達と「突起土偶」、そして山形土偶の形成 (オム4)印旛沼と仙台湾、そして山田湾まで繋ぐ人面把手の意義 (オム5予告)「髑髏信仰」と「亀ヶ岡型変相イデオロギー」、そして「ムロさま」 (オム6予告)「髑髏信仰」は「ムロさま」から容器形土偶や顔壺の土坑墓へ
新展開3	「シオ(塩)もん」の 「限界経験」打破 縄文時代の製塩土 器は「採鹹・せん ごう土器」が真相！ 固形塩の物流では なく、「大形魚塩蔵 品」・「汽水系塩 煮品」に留まらず、 濃縮海水を内陸 で希釈する「淡水 魚(含む特産ウナ ギ)塩煮」の普及 か？	「製塩土器」の確立から製塩遺跡の操業へ、爆発的普及の晩期社会と「定住制」の定着 (シオ1)定住制社会から生業往還としての製塩遺跡へアプローチ (シオ2)アマモやヨシ(アシ)の「草木灰」は濃縮工程での使用か？ (シオ3)製塩遺跡の操業タイプ(短期型と長期型)と燃料問題 (シオ4)下布田遺跡の「製塩土器」在地性は古鬼怒湾型変遷との乖離！／枯れたアマモを特 定の場所に集めて乾燥させる「塩草場」の存在、及び天日と地熱(熱砂)利用の採 鹹・せんごう工程に相応しい「製塩土器」鉢形態の確立 (シオ5)宇都宮市刈沼遺跡からは寺野東遺跡よりも多数の「製塩土器」が検出し、在地で淡水 魚の「塩煮」が浮上。鬼怒川流域の口縁部形態は下布田遺跡とは大きく異なり、古 鬼怒湾型変遷の1系列である口縁部水平ヘラカットが定着 (シオ6)三陸北部における「製塩土器」の年代と系統(1)久慈市大芦Ⅰ遺跡の長胴深鉢形態 と僅かな出土点数に注目した「採鹹・せんごう土器」の提唱 (シオ7予告)古鬼怒湾で後期から発達するウナギのブツ切りによる「ウナギ鍋」は塩煮／ 「採鹹・せんごう土器」の定着に果たす古鬼怒湾ウナギ塩煮の役割に注目！
新展開4	「タマきみ(君)」の 「限界思考」打破	ヒスイ製勾玉・小玉の晩期流通(関東各地域拠点でも製作)と弥生時代中期中葉「再葬壺棺 墓」への流通実態(上越周辺北信経由)解明 (タマ1)熊谷市飯塚南遺跡の土坑墓出土ヒスイ製勾玉と飯塚遺跡群 (タマ2)長野県坂城町保地遺跡の抜歯人骨とヒスイ製垂飾品の年代【『利根川』39】

1.【地域とパブリック・アーケオロジーの展開】：各地域における自然の魅力と基層文化の意義を考える！

1-1.【山田湾考古と「山田湾まるごとスクール」】：山田湾に学ぶ郷土ー自然と人類の共生ー

★「山田湾まるごとスクール」による交流を通して山田湾の復興に想いを馳せるとき、人々の生き様の土台となる地域の自然と風土の関係こそが本来の復興の対象であり、高台移転という居住インフラ整備は復旧に過ぎないでしょう。新たな環境に変化することで不安も多い中、改めて山田湾に生活する方々の普遍的な価値を見出し、「旅の人」と共にその価値について考える機会を創出したいと思います。

3・11という凄絶な出来事からの負の連鎖は孤立することで増長・輻輳しますが、新たにより多くの方々が山田湾との「かかわり」を深くするソフトウェアがあれば、孤立が断ち切れる可能性もあります。五十嵐聡江さん編集による第5回「山田湾まるごとスクール」記録集が被災地におけるパブリック・アーケオロジーの実践を中心とした背景には、山田湾との「かかわり」を一層深くする決意が垣間見えます。

【1】房の沢古墳群形成の経済基盤について：馬飼いとコンブ、そして……

・先週2/25(日)の「やちくりけん」で製鉄関係の議論がありました。そこに穴澤義功氏が参加され、幸いにも古代の製鉄に関する知見を得ることが出来ました。穴澤氏によれば、8世紀に蝦夷による製鉄の痕跡は現状では確認できないとのことで、恐らく、この状況が通説なのでしょう。

・蝦夷と言えば、山田湾です。製鉄遺跡の異様に多い山田湾と、古代刀の副葬が豊富な房の沢古墳群を共に目に焼きつける時、想いは8世紀の蝦夷による製鉄の可能性に向かいます。製鉄遺跡の見直しは精査や調査の進展を俟つとして、房の沢古墳群の特徴でもある古代刀からの問題提起に耳を傾けるならば、石井昌國・佐々木稔(2006)『古代刀と鉄の科学 増補版』雄山閣 は最後の「むすび」(p.237)として以下のように締め括りました。

「奈良朝が「鉄冶を禁じた」東北北部の蝦夷の鍛冶工房に原料銑鉄を搬送し、鍛冶工を派遣した交易集団が存在したはずである。この集団は蔵手刀を所有していた蝦夷の族長クラスの好みを把握し、強い柄反りの方頭大刀・立鼓柄刀などを畿内の非官衙工房あるいは交易ルート上に設置した拠点工房で作らせ、公的な場を経ない交易品の一つに仕立てたのではなかろうか。」(ゴチック体は引用者)

・房の沢古墳群の「強い柄反りの方頭大刀」については津野仁・内山敏行(2017)「二 武器・武具・馬具」『モノと技術の古代史 金属編』吉川弘文館が「8世紀中葉～後葉」の年代を与えています。

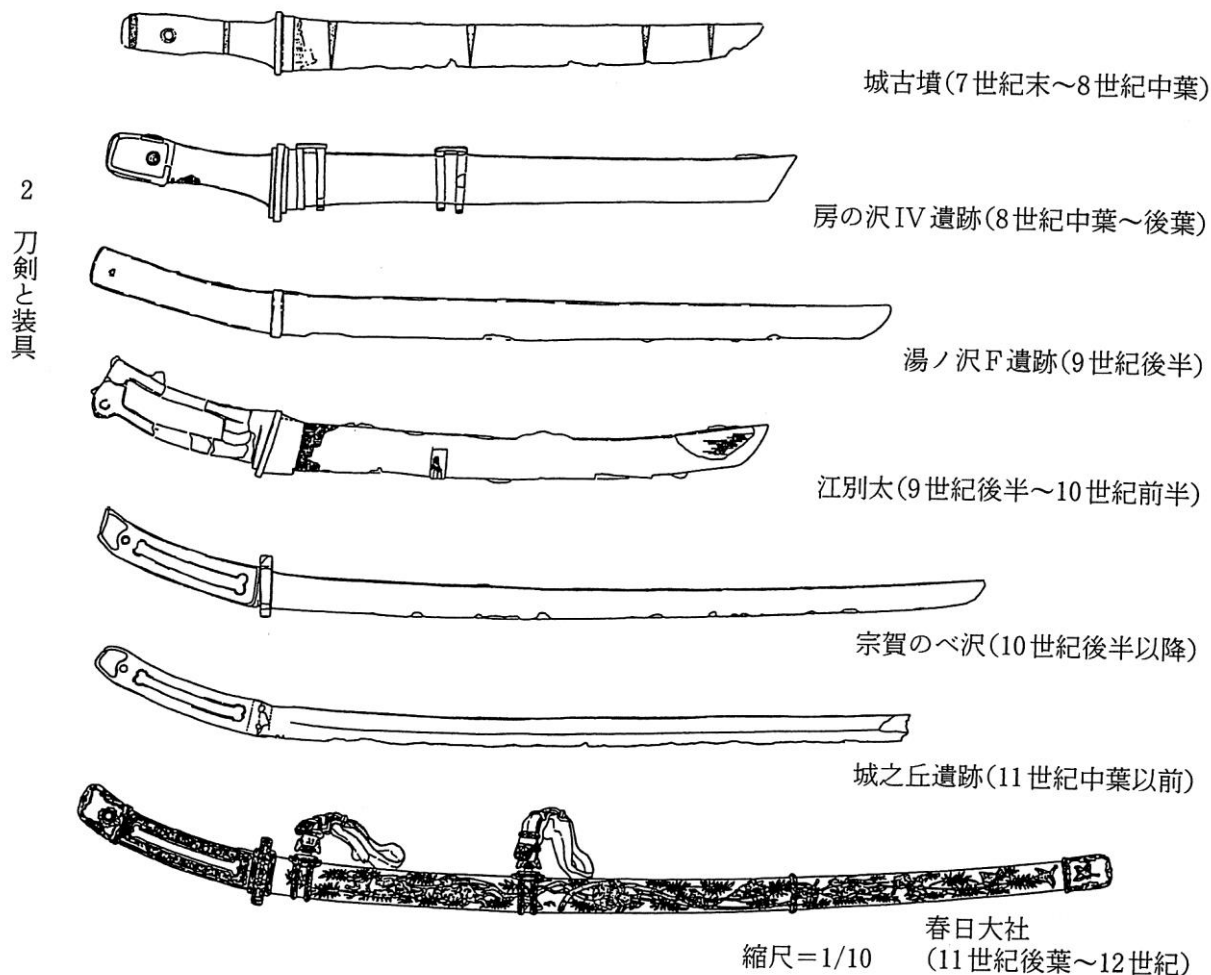
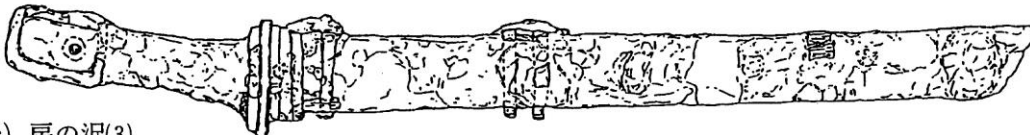


図3 毛抜形太刀への過程

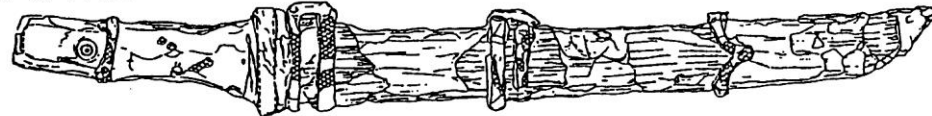
a) 房の沢(1)



b) 房の沢(2)



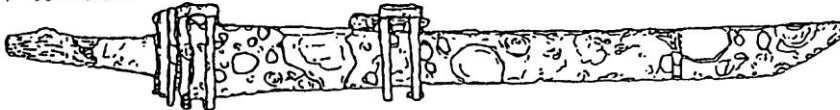
c) 房の沢(3)



d) 房の沢(4)



e) 房の沢(5)



f) 房の沢(6)



g) 長根 I(1)



h) 長根 I(2)



0 10cm

a, b) 方頭大刀、c, d, g) 立鼓柄刀、e, f, h) 判別不能

図16 柄反りの強い方頭大刀と立鼓柄刀の出土例

その後、蕨手刀は毛抜透
蕨手刀から毛抜透大刀(十
世紀の長野県諏訪地方に出土
例)という形態変化を経て、
古太刀とも呼ばれる古式の
日本刀に到達した。
律令体制下では位階に応
じて授かる大刀(直刀)の種
類が定まっておき、それら
の大刀は畿内の官衛工房で
製作された。柄頭が方形の
方頭大刀は、蝦夷の族長級
が葬られた古墳(終末期古
墳)から出土する例が多い。
ところが近年、下賜され
るものとは違い、蕨手刀の
ように柄反りを強くした大
刀が見られるようになった。

221 日本刀の成立過程

・まずは3・11復興関係の発掘調査で山田町の話題としてパブリック・アーケオロジーで大きく取り上げられ
た製鉄遺跡の例を紹介しますが、今後改めて検討したいと思います。

【2】山内清男の「サケ・マス論」というパブリック・アーケオロジーの意義と「水産考古学」への接近

・2011年10月10日の釜石泊で同じホテルでしかも偶然同じ酒何処でも一緒した二人連れと、「山内清男
のサケ・マス論」で大いに盛り上がりました。3・11関連で水産学関係者とのこの不思議な出会いがあり、つ
くづく「山内清男のサケ・マス論」はパブリック・アーケオロジーとしても卓見との感慨とともに、改めて今日の
環境変動との関係も気になります。

- ・岩手県の漁獲量優位対象はサンマとサケですが、2017年は先ずサンマ漁の不振に始まりました。続いて2017年晩秋の山田町「鮭祭り」がサケの不漁により中止となりました。サンマは縄文時代の貝塚からは殆ど出土しませんが、サケは縄文時代にも通じるために問題の発端として改めて「山内清男のサケ・マス論」と環境変動の関心が気になりました。西日本ではサケが遡上しません。それは海水温の温暖な環境が原因で、子供の頃の南限は関東地方と言われていました。
- ・縄文時代晩期は寒冷化の時期であり、「亀ヶ岡文化」の発達には目を瞠るものがありますが、これが「山内清男のサケ・マス論」に通じた訳ですが、では、温暖化の発達が言われる「黒浜式」期ではどうでしょうか？九州島から本州にかけては「イルカ猟」が活発に行われますが、サケ漁は寡聞にして知りません。東京では寒冷化とされる草創期初頭の前田耕地遺跡でサケ科の骨の出土があります。縄文時代一万年の環境変動を考えますと、「山内清男のサケ・マス論」も年代と地域に大きな変動が見られることになります。
- ・このように**環境変動と水産資源変動との関係を検討する「水産考古学」**が水産関係者から新たなパブリック・アーケオロジーとして提起されており、しかも大変面白い研究ですので具体的に紹介します。

1-2. 【奥東京湾と考古とパブリック・アーケオロジー】：伊奈町本上遺跡からのメッセージ

- ・本上遺跡の企画展に参加され、発掘調査報告を入手しました鴨志田隼司さんから所見を伺います。

1-3. 【東京湾と考古とパブリック・アーケオロジー】：千葉市大膳野南貝塚からのメッセージ

- ・先日「やちくりけん」で常松成人さんから**佐倉市岩名天神前遺跡の縄文時代後期貝塚**について文献の補遺がありました。**岩名貝塚**と呼ばれるこの貝塚は地点貝塚でしかも斜面部にも形成される点に特徴があります。この特徴については**酒詰仲男氏が貝塚の分類で「a型」とした標識例**としています。岩名貝塚は古鬼怒湾岸ですが、東京湾東岸では千葉市大膳野(南)貝塚が標識とされています。
- ・近年報告されました**大膳野南貝塚からはマッコウクジラの肋骨製骨刀**が出土しており、田の浜貝塚と共通する意識が興味深いですので、別な機会に紹介します。

1-4. 【古鬼怒湾と考古とパブリック・アーケオロジー】：シラス不漁に鑑み、古鬼怒湾ウナギからのメッセージ

- ・常松成人さんが学習院大学生であった頃、一緒に取手市中妻貝塚のA, B, C, D地点を発掘調査しました。その時に「堀之内1式」～「加曾利B2式」にかけてウナギの骨が大量に検出され、**古鬼怒湾名物「ウナギ鍋」**が話題になりました。今では「**ウナギのぶつ切り塩煮**」を想定しますが、古鬼怒湾では小魚を含め「**塩煮**」の発達にウナギの参画が顕著な特徴です。「**製塩土器**」は「**塩蔵品**」を含め「**多様な魚食文化**」を背景にした生活様式から成立したことが考えられます。

2. 【その他情報交換など】：自由な意見交換とワイン・アーケオロジー

2-1. 今後の予定

① 3/12(月)～3/17(土) 浅野光彦個展のご案内

浅野 光彦 展 - 縦と横 -

2018年3月12日(月) - 3月17日(土)

open / 11:30 ~ 19:00 <最終日は17:00まで>

作家連絡先: hatakede@rhythm.ocn.ne.jp

ASK?(P)

〒104-0031 東京都中央区京橋3-6-5 木邑ビル B1F

TEL/FAX 03-5524-0771

E-mail / asku@oak.ocn.ne.jp http://www.kb-net.com/ask



◆東京メトロ銀座線「京橋駅」1番出口より徒歩1分

◆都営浅草線「宝町」4番出口より徒歩1分

② 4/8(日) 第87お花見ワークショップ : 見沼たんぼ西縁低地の桜満開は台地上より1週間遅延するため、桜吹雪に合せての日程を予想しました。

③ 「見沼たんぼ見どころガイ2018」発行予定(4月配布)。

- ・昨年の縄文時代に続いて、埼玉大学有機農業研究会による「**弥生時代から見る！見沼の魅力**」が掲載予定。乞うご期待！

2-2. その他

以 上